



新橋小学校

学校だより

令和6年1月12日
令和5年度 第9号

新年の厳しい幕開けに寄せて

校長 西尾 琢郎

新年明けましておめでとうございます。本年も新橋小学校をどうぞよろしくお願ひします。

さてこの年明けは、私たちの想像を全く超える形で幕を開けることになってしまいました。元日の能登半島を襲った大地震にはじまり、その被災地への物資輸送を担っていた海上保安庁の飛行機が、滑走路上で旅客機と衝突炎上事故を起こし、また他にも火災や事件など、多くの悲しい出来事が伝えられています。

私とは申しますと、昨年来、体調不良により子どもたちや教職員はじめ、保護者の皆さまや地域の皆さまにもご迷惑をお掛けしております。昨年末には入院と二度目の手術を受け、今度こそはと完治を目指して治療に励んできました。しかしながら年初の検査で、今回の手術でも快方に向かっていないことが分かり、授業開始となる9日をもって、3度目の入院、そして手術を受けることとなってしまいました。1月末までには職場に戻るべく療養に努めてまいりますので、何卒ご理解賜りますよう、よろしくお願ひします。

さて、これら一連の出来事を経て、今、私が強く感じていることが三つあります。

一つ目は、災害や病が、決して人間の都合や思いをくんでくれられないということです。私のこれまでの人生で、もっとも大きな出来事が何だったろうか振り返ると、それは1995年の阪神淡路大震災でした。私の生まれ故郷を襲ったこの震災は、松の内が明け、社会が本格的に動き出そうというタイミングで起きました。それも冬場の早朝5時台という多くの人がまだ床にある時間に、人々の生活を襲ったのです。

そしてもう一つ、恩師であった中学時代の部活の顧問の早逝もまた、私にとって大きな出来事でした。その先生は30代の半ばで病魔にむしばまれ、38歳という働き盛りの年齢で、ご家族を残してこの世を去りました。

いずれの出来事も人間の都合や思いにはまったく関係なく起こり、容赦ない結果をもたらしました。私たちが「当たり前」と思っている日々の生活は、いつなんどき、どんな危機に瀕するか分からないものです。だからこそ私たちは、一日一日を大切に生きなくてはなりません。思い通りにならないことは人生に山ほどありますが、それを誰かのせいにとしたり、くよくよと思いついていたりする時間は、「もったいない」の一言です。自分自身がどう生きるか。大切なのはそのことではないでしょうか。

二つ目は、経験の重要性と危険性です。私は民間から横浜市に学校長として採用された年、実は大学院の修士課程1年生でした。そこで取り組んでいた研究テーマが防災教育です。私は修士論文の中で、災害における経験について、次の2点について書きました。

周期的に発生することの多い大地震などでは、人間個人の寿命というスケールの中で経験を蓄積することが難しく、結果として「災害は忘れた頃にやってくる」ことが多いこと、しかしそれと同時に、記憶だけでなく記録も含めた過去の震災のありようがある種の先入観として働くと、後の震災対応に支障を来す場合がある、ということです。

近代以降の日本における最初の大震災となった大正関東大震災では、死傷者の多くが火災によるものでした。それに対して阪神大震災では、犠牲者の死因の多くが、建物や家具による圧死でした。そして東日本大震災では津波による被害が最大のものでした。

今回の能登半島地震では、報道によればそれらすべての要因が、人々に襲いかかっているように見えます。しかし現実には、東日本大震災の記憶による津波避難に集中するあまり、それ以外への対応が後手に回った感が否めません。百聞は一見に如かずという通り、私たちにあって、自分が見聞きし経験したことから得られるものは大変に大きいのですが、同時に、そればかりに頼り切っていては見逃してしまうこともまた多いのです。ですから私たちは、自らの経験を大切にしながらも、いつも虚心に、さまざまなことから学ばなくてはならないのだと思います。

そして三つ目は、人を元気づけ勇気づけるものについてです。

冒頭お伝えしたように、今、私は、3回目となる左目の手術に臨もうとしています（このおたよりが皆さんに届く頃には、術後の療養に入っているはずです）。同じような症例で3回目の手術というのは相当に珍しいことらしく、主治医の先生から「一緒にがんばりましょう」という言葉だけをいただいています。命に関わる病ではないのは救いですが、正直なところ「もう治らないのではないか」という怯えも感じています。

しかし私には、心強いたくさんの応援団がついています。言うまでもありません。それは新橋小の子どもたちです。1回目の手術を受けた昨年秋の運動会のと時から、こうして学校を留守にするたび、子どもたちからたくさんの声を、手紙を、山ほどもらってきました。「大切なのは自分自身がどう生きるか」と言っておきながら矛盾した話かもしれませんが、人が自分らしく生きていくためには、自分が周囲の人たちとどんな風に関わるか（または関わらないか）、ということが決定的に大切だと思います。子どもたちが贈ってくれた言葉の一つひとつが、私に大きな勇気を与えてくれています。

私たち教職員は、子どもたちに何かを教えよう、与えようとしがちですが、その実、いつも子どもたちからたくさんのものをもらっています。それはきっと、保護者の皆さんも同様ではないでしょうか。

厳しい幕開けとなった今年ですが、私たちはこれからも学び、考え、行動し続けることで、少しでもよい明日を子どもたちに手渡せるよう、努力していきたいと思います。改めまして、本年もどうぞよろしくお願いいたします。